

<書 評>

Linguistic Theory, Linguistic Description and Language Teaching
Eddy Roulet, Longman Group Limited, London 1975

横 田 勉

本書は Applied Linguistic and Language Study Series の中の一冊であり、構成は次の通りである。

第一章 伝統文法 (Traditional Grammar)

第二章 構造主義文法 (Structuralist Grammar)

第三章 変形生成文法 (Transformational Generative Grammar)

第四章 言語学諸理論、言語記述及び言語教育 (Linguistic Theories, Description of a Language, and Language Teaching)

参考目録 A. 一般言語学、記述言語学、社会言語学 (General Linguistics, Descriptive Linguistics, Sociolinguistics)

B. 文法的諸モデルの言語教育への応用 (Applications of grammatical models to Language teaching)

C. 言語教育テキスト (Language teaching coursebooks)

著者自身もその序文で明言しているように、単に言語学的成果をそのまま言語教育に持ち込むことは大いに検討の余地がある。言語教育に対する一種の問題提起として、本書が読まれることが、著者の願いであるとも言えよう。したがって、標題のような言語学諸理論については大ざっぱな概観を手ぎわよくまとめたにとどまり、第四章を中心に、言語教育の立場から、教育文法のあり方を問う点が、本書の特色である。

まず伝統文法に関する第一章では、それが必ずしもすべて排斥されると言うのではないが、言語教育の立場からみると、あまりにも古い書きことば中心の教材とそれらの文法的な解説に終始していると指摘する。このような指摘はすでに常識となっていることで、別に目新しいことではないが、著者はこれを内容と文法の両面からおよそ14項目にわたって列挙する。これらの項目は確かに不備、不十分な伝統文法の欠陥ではあるが、言語教育の立場からはまだ研究すべき余地のある文法理論でもあることを考えなければならない。例えば古典語の文法体系を殆んどそのまま借用したとして、著者が不満を述べる格の問題にしても、意味構造を捉える場合には、イエスベルセンなどの説く外延 (extension)、構造言語学における構造的意味、更には格文法の理論などの考え方と比較して、前者が後者の諸理論とは全くかけ離れて教育文法の範ちゅうに入らない文法であることはどうであろうか。

このようなことは構造言語学や変形生成文法についても言えることであるが、そのような個々の

文法項目について、言語教育の立場から再検討し、再編成するのは教育文法の内容に関する事項である。したがって著者はとりあえずそのような教育文法を言語教育の理論的モデルとして捉え、その骨組みを提唱しているのである。このような考え方のもとに、第二章の構造言語学については、伝統文法の書きことば中心の文法が話しことば中心に近い文法とその記述へと変わってきた点を認め、ある程度の成果があったと述べている。この点もすでに以前から指摘されていることであるが、その中で著者が特に強調していることは、従来の言語教育はその変数を言語ただ1つに限っていたことが最大の欠陥であるという点にある。著者はこの変数を言語、学習、教授と大まかに3つに分けて考えているようである。そうすると、伝統文法では言語の一部、構造言語学では言語、変形生成文法では言語と学習、そしてこれからの言語教育は言語、学習、教授の3つの変数全部を含むような理論的モデルを考えると、言ってもよいような一連のパターンを描くことができる。しかしながら言語にせよ、学習或は教授にせよ、固定したものではなく、学問の発展と共により合理的な方法が期待されるものである。したがって、ただ単に特定の変数だけを中心に追いかけることは、各変数間の相互関連をおろそかにすることになってしまう。例えば構造言語学がスキナー流の言語的条件づけ理論に基づいているからと言って、一概にチョムスキー流の言語理論に置き換えるようなことを著者は警戒するのである。それと云うのも言語だけを変数として考えるからである。勿論言語こそ言語教育の中心の変数として考えられるものではあるが、その変数を完全に定義し説明しつくしてからでなければ、他の変数たる学習や教授をとりあげることは時機尚早であると言うような風潮は改めなければならない。変形生成文法の理論は益々抽象化され、理論そのものも進展が早く、じっくり検討し、検証するだけの時間もない程であると著者は指摘するが、それでも尚かつ現場においてはとにかくあるべき言語教育の理想を求めて、教師が意欲的にこれに取り組むという姿勢が大切である。と本書の最後の方で説く著者の言葉には説得力がある。

変形生成文法は言語教育に対して果たして貢献し得るものなのであろうか、という疑問は、日本の場合、特に外国語教育としての英語教育にたずさわっている人たちから投げかけられるものである場合が多い。この疑問に対する解答とも言うべき、理論の有効性、実証性についてはさて置くとして、本書の第三章の終りの部分に列挙されている文法事項はこれからの言語教育を考えるに際して参考になることが多いと思われる。これとあわせて、Owen Thomas や W. O'Neil の考え方が引用されているが、著者をはじめ多くの人たちから指摘されている変形生成文法理論の流動性をも併せ考えることによって、我が国の言語教育にたずさわる人たちには考えさせられる点があるものと言えよう。例えば変形規則の進行と言語教授のための文の生成と体制についての説明とは一致していない、と言うような指摘は教育文法の具体的な一項目を成すものと思われる。このような例は本書の他の章、例えば構造言語学に関する部分においても、かなり拾い出せるはずである。したがって、それらの諸項目をどのように配列し、教授理論に基づいてどう編成するのかと言うことが当面の課題となる。

第四章では理論の応用、現代語教育、今後の課題などについて、問題点を列挙している。前にもふれたが、言語教育の立場からは、構造言語教育とか、変形生成文法の言語教育など言うものは

ないのである。言語教育はさまざまな学問分野における成果を基にして、その上に構築されるはずのものであると考えることが、著者の指摘を待つまでもなく当然のことである。したがって言語教育の変数と言う考え方に基づく方法論を展開するに際しても、変数そのものを言語教育の範ちゅうで捉えることを確認すると同時に、変数相互の関連を教育学の範ちゅうで捉える必要がある。例えば文を単独にとりあげて、それを分析し記述するだけであった今までの言語学の方法は不十分であったとして著者が指摘する構造言語学や変形生成文法の言語の捉え方は、言語教育と言う観点から見た場合に言えることであって、言語学の立場からはむしろ当然のことである。したがってこれからの言語教育は、単独な文の分析を更に発展させて、communicative units の分析と記述にまで至らなければならないとして、著者はいわゆる text grammar と discourse grammar の必要を提唱している。ここに先程述べたような問題点、すなわち言語学と言語教育学、各種の学問分野の応用、と言うことを確認しなければならないことがわかる。

応用言語学の立場から言語教育を考えるとすれば本書でとりあげられている社会言語学がまず最初の研究対象となる。我が国の外国語教育を考える場合には、Firth や Hymes, 或は Cohen などの説く言語観や言語教育観に共通したこの sociolinguistics のアプローチが参考になるはずである。本書はこの点で、ethnography (民族言語学) にもふれているが、今後の言語教育の方向を定める上で有意義な提言である。その他にも、言語の指示的機能以外の諸機能、subcodes の習得、communicative acts の分類例など、言語教育の1つの理論的モデルを描く場合に有効ないくつかの要素が列挙されている点、有益である。sociolinguistic situations に応じた学習者の needs を考慮すべしとの提言は、とりもなおさず教育のあり方を根本から問う問題でもある点で、本書は言語教育学と教育学そのものとの関連についても1つの課題を提供していると言えよう。

以上

編集後記

「人文科教育研究」Ⅱをおとどけします。内容をご覧いただきましたように、ことばとその教育に関しての、裾野の広い研究集録です。執筆者それぞれが、現在もてるものを最大限発揮したものです。忌憚のない批判を寄せていただきたいと思います。

編集委員 横田 勉、新名主健一、塚田泰彦

人文科教育研究Ⅱ

1976年6月19日 発行

編集兼発行人 「人文科教育研究」編集委員会

東京都文京区大塚3-29-1

東京教育大学内

人文科教育研究室気付

印刷・製本

城東印刷社

電話 03 653-6548

655-3354

頒価 500円